

# 木と建築とまちづくりフォーラム 地産地消で地域活性化



地場の工務店は、地元木材を積極的に使った家づくりを広めて、地域活性化に貢献しよう……。『地産地消』をテーマに『木と建築とまちづくりフォーラム』が、八戸市の八戸グランドホテルで開かれた（2010年9月）。240席用意されたホテルの大ホールが満杯になった。

主催は『あおもりの木で地域を支える「伝統と技術」の会』（大山重則会長）。地場の工務店らが団結し、地域の木材を生かした住宅づくりを広めることによって、木材資源の地域循環が実現し、地元を経済的な潤いをもたらすと同時に、大手への対抗策になるとして立ち上げたもので、会員は地元工務店の経営者らを含む約50人。年に2回ほど参集し、情報交換をしながら地産地消の推進に取り組んでいく考えだ。

フォーラムでは、青森県三八地域県民局林業振興課の上野文明主査が『県産木材の魅力』、また茶室建築の大家として著名な工学博士の中村昌生氏（財団法人・京都伝統建築技術協会理事長、京都工芸繊維大学名誉教授）が『伝統を未来につなぐために 木と建築とまちづくり』についてそれぞれ講演した。

# 「県産木材の魅力」

## 上野文明氏の講演

自宅を建てる際に「県産材を使いたいですか?」——と、県が行ったアンケート調査(2009年)の結果、「積極的に使いたい」や「価格が同じであれば使いたい」など、指示する〴〵と答えた割合が約90%にのぼった。中でも「積極的に使いたい」は全体の3分の1にあたる34%を占めた。県産材に県民の高い関心が寄せられていることが、アンケート

によって明らかになった。

このことを踏まえ、上野氏は、県産材の代表として下北のヒバ、県内全般に豊富に分布しているスギ、県南の南部アカマツを挙げ、これらのうち7万立方メートルとわが国第2位の生産量を誇る南部アカマツについて説明した。

「アカマツには、反り、ねじれ、割れ、変色(アオと呼ばれる)などといった建築材としてはクレームの対象となる難点があったことから、使用が避け

られるようになって、チップ材として使われることが多かったのですが、人工乾燥の技術の向上によって高品質な乾燥材の生産が可能になりました。南部アカマツを、県南特産の樹種としてブランド化を進めていきたいものです」

## 地域で循環 人とつながる 県産材

アカマツの木肌は、時が経つにつれて色つやが出てくる。だんだん鉛色に変わり、磨けば黒光りしてくる。地元の山で育った木だからこそ愛着がわく。愛着があるからこそ大事にして磨き込む。——上野氏は、無垢材の味わいをそう話した上で、「地域の木材資源が地元で消費されることによって、樹木に携わる仕事を『生業』にできる」とし、「そのことによって、つくる人と、つかう人が、つながることの魅力」であると強調した。



て木材をつくる人たち(森林所有者、素材生産者、森林組合)↓「原木から製材品をつくる人たち」(製材所、材木店)↓「製材品から生活に使うものをつくる人たち」(家具、建具、木工)↓住まいをつくり提案する人たち(大工・工務店、建築・設計・デザイン)——と、川上から川下へ、流れ、建築費などの一部が森林整備費として山へ還元される。これが木材の地域循環である。

地域における人との関わりが深いことが県産材を使うことの大きな魅力。それを上野氏は、「地域で循環 人とつながる 県産材」と表わした。



「地元で育った木だから愛着がわく」と上野氏

# 「伝統を未来につなぐために」



「住宅を商品にするべきではない」と訴える中村氏

## 中村昌生氏の講演

### 大工の技は天才的 継承されてきた 伝統建築

京都から新幹線を乗り継いで八戸入りした中村昌生氏は、「今回の旅だけでなく以前から感じていたことですが」と前置きして、「列車の窓から眺める風景に、その地方ならではの風景というものが失われつつある」と語るところか

ら講演を始めた。

地方ならではの風景——を形づくっていたものは、家であった。地方の気候風土に合わせた造りの家々が建ち並んでいたことによって、その地方ならではの風景が形づくられていたものだが、戦後、商品としての住宅が増えるにつれて、地方の風景が廃れ出したといっている。

新建材を開発し、大量生産し、やれツーバイフォーだの、やれプレカットだのと早く安

くできる商品化された住宅が全国で建てられるようになったことによって、日本建築は棄てられてきた。木の文化である日本建築の伝統が高度成長の陰で棄てられてきた。南国であれ北国であれ商業ベースにのって画一化された住宅の増加によって、地方の特色ある風景が衰退した。

地域の山で育った木を、生きた素材として取り扱い、上等な建築を作る。日本の大工の高度な技術は天才的とさえいえる。そういう日本の優れた大工によって継承されてきた木の建築が、便利さだけを追求した商品としての住宅になってしまった。

中村氏はこう訴える。

「便利なだけの住まいからは豊かなものは生まれてこないと考えるのです。住宅を商品にするべきではありません。住宅建築の立ち還るべきところは戦前の大工技術です。それまで永々と大工から大工へ

と継承されてきた伝統建築構法です。日本文化は木の文化で、戦後の在来工法とはまったく違うものです。伝統構法こそ基本にすべきです」

戦後は鉄やコンクリートを使った洋風建築ばかりがもてはやされ、工学的な科学性ばかりが追及されてきたため、住まいと外の自然とが隔絶されてしまった。庭に家を溶け込ませ、自然と一体になるために設けた縁側や庇(ひさし)が取り外された家からは、風通しの必要性も失われ、家が呼吸できなくなってしまう。

### つつまじやかな茶室 自然と共生する たたずまい

伝統的木造建築における日本の建築を高めた工匠の技は、世界に誇りうる日本の文化遺産である。日本文化は、木の文化だ。そのような技や文化は、千二百年の京都の歴史

の中で育まれ磨かれつつ継承  
発展を遂げてきた。日本人の  
美意識が磨き込まれた、しか  
しそのことを主調することな  
く融和した伝統建築構法の粋  
が、京都の茶室に凝縮されて  
いる。日本建築の真髄は、茶の  
湯の思想に通じる。

中村氏は、「たまたま出かけ  
た桂離宮で、茶の湯がなけれ  
ば、こつした風情あるたたず  
まいにならなかつたのでは」  
と感じたという。そこで、茶の  
湯を通して日本建築の伝統を  
考え始めた。

茶の湯（茶会）の特色は、自  
然を生かす気持ちを重視する  
こと。水差しや、茶杓、茶筌の  
道具に自然の素材を用いて、  
作る人が人間性や美意識を込  
めると、それは芸術品になる。  
生命が吹き込まれる。

そんな道を開いたのが千利  
休だ。高価なものを使う必要  
はない。お点前の所作も、麗々  
しくするのではなく、なるべ  
く自立たず、自然体がいい、と

する。

互いがへりくだり、謙虚な  
姿勢でもてなすという付き合  
いをしていけば、争いになる  
ことはない。客を迎える時に  
敬えば対立は起きず、和が生  
じる。

### 全体が調和する 日本の建築の思想 『数寄屋建築』

利休は、茶室も『わび数寄』  
という形式で、簡素な丸太を  
使って組み立て、庭の茂みの中  
に隠れるような、低くつつ  
ましかかな茶室をよしとし  
た。

こつした茶の湯の考え方は、  
構築力をあらわにせず、自  
然と共生できる、一つだけが  
屹立（きつりつ）せず、全体  
が調和するという日本の建築  
の思想に通じる。それが『数寄  
屋建築』だ。日本人が築き上げ  
てきた美学なのである。

こつした日本の伝統建築に  
立ち還り、伝統を引き継いで

いく大工を育成していったこ  
そ、失われてきた日本の風景

を取り戻すことができる——  
と説いた。



中村氏が設計した出羽遊心館（山形県酒田市）